

封じられる松沢秋雄の声

—城山三郎『素直な戦士たち』における夫婦間衝突回避の状況—

徳永光展*

(e-mail: tokunaga@fit.ac.jp)

目次

1. 問題の所在
 2. 見合いの席で
 3. 結婚生活を追って
 4. せめぎあいの中で
 5. 結語
-

1. 問題の所在

『素直な戦士たち』に登場する人物は、そう多くはない。松沢家一家、即ち、秋雄・千枝夫婦、長男・英一郎、次男・健次がいて、この家族間の交渉が作品を貫いている。その次に見ておくべきなのは、秋雄の職場関係の人々である。つまり、具体的に言えば、係長の尾石に女性社員・北茂子、原野高子、岡野ヒロミといったところである。その他としては、デパートで英一郎がぶつかった婦人や、国立T大学付属小学校受験時の面接官、小学校1年生時の担任などが英一郎の幼児期を追う記述の中に点在するが、全編にわたって描かれるのは、松沢一家と秋雄の職場関係者なのである。作品は、突拍子もない夢をひたむきに語る千枝に読者の注意が注がれる構造で幕を開け、英一郎誕生後は徹底的な管理が千枝によって遂行される中で、英才育成計画がどこまで実現できるかが描かれているのである。その意味では、千枝を中心に作品を追うという読み方やそれにど

* 福岡工業大学社会環境学部准教授 日本近代文学専攻

こまで英一郎が耐えられるか¹⁾といった捉え方が主な理解の仕方であろうと考えられる。

しかしながら、千枝の野望に付き合わされるのは夫の秋雄であった。では、秋雄を中心に作品を読み解いてみた場合、どのような問題が浮かび上がってくるであろうか。本稿では、作品の前半部、すなわち、見合いの場面に始まり、英一郎が小学校1年生となり、学校で先生に砂を投げつける事件が起きたところまで²⁾における秋雄の心理分析を千枝との交渉に絞って見ていこうとするものである。作中には、秋雄が会社で家庭の話を持ち出す場面も描かれてはいるのであるが、秋雄が長男の英才教育に同調していくのは千枝に感化されたからに他ならない。よって、彼女とのコミュニケーションがどのように推移したかの分析は作品の基本的理解に不可欠であると考えられるからである。

2. 見合いの席で

秋雄は、IQ153 (9頁) ³⁾で、父は東大法学部出身 (9頁) である。しかしながら、自らについては「うちの会社では、ぼくのような二流三流の私大卒では、出世のしようもないですよ」 (11頁)、「……あきらめざるを得ないんです。もともと、もともと、それほど出世しようという気もなかったんですが」 (11頁)と見合いの席で千枝に対して「自虐的につけ加えた」 (11頁)が、かといって「結婚に対して、格別期待を持っていなかった」 (15頁)という設定になっている。その直後には、「会社づとめがすでに平々凡々としている上に、平々凡々たる家庭生活を重ねるのかと、むしろ、気重く思うことさえあった。といって、突飛で波乱万丈になりそうな結婚に挑む元気もなければ、そのための余計な苦勞も背負いたくもない」 (15頁)という記述が続いている。秋雄の年齢は不詳であるが、千枝より数歳年配と仮定すると、この時には20代後半であったと推測できる⁴⁾。まだまだ若く、人生はこれからという時期であったにもかかわらず、平凡な私大卒で、退屈したサラリーマン生活に対して既に諦念を抱いており、優秀だった父のようにはなれなかった自身に対して複雑な劣等感を抱いていた様子も十分に想像される。学生生活もぼつしなかったし、職業生活も凡々としているのであるから、結婚生活にも過剰な期待を抱かないことで、自分自身を守ろうとしているかのような素振りも見え隠れする。すると、結婚相手に対しても過剰な望みは持た

-
- 1) 英一郎が勉強の行き詰まりに喘ぐ作品後半の様子については、徳永光展 (2009b) [497-506頁] で論じた。また、作品の後日談については、徳永光展 (2010b) [416-419頁] で論評した。
 - 2) この箇所における英一郎の心理分析は、徳永光展 (2010a) [1-27頁] で行った。
 - 3) 鈴木ビネーの品等表では、IQ150以上の知能段階は「極めて優秀」で、0.095%の出現率であるという。[教師養成研究会教育心理学部会 (1981) 193頁]
 - 4) 徳永光展 (2009a) 167頁

ず、安易な生活に終始している自らを受け入れてくれるような存在でありさえすれば、適度な線で妥協したであろうことも容易に想像できるのである。

そんな秋雄の前に颯爽と登場したのが千枝であった。東大法学部に楽々と入れるような子供を作ってみたい（13頁）、そのために最もよい条件とはいえば、夫のIQが高いこと、出世を望まず、趣味もなく、子育てに協力を惜しまない男性（16頁）をというような突拍子もない夢を熱に浮かされたかのように語るのが千枝であった。そんな千枝にとって秋雄は「すべてわたしの希望どおりですわ」（16頁）と断言するにふさわしい条件を備えた人物であった。この男性なら、言うとおりに自分の子育てについてきてくれるという訳で千枝は有頂天になるのであった。

一方、秋雄はというと、これまで業のように抱いていたコンプレックスを千枝が真面目に評価してくれているかのような反応を示すので、非常に驚いてしまう。最初は茶化されているかと疑ったが、相手はどれも本気らしいので、意外な感情に支配されていく。出世をすっかりあきらめた（11頁）人生に甘んじなければならなかったこと、テレビが「最大の暇つぶしで」（68頁）、特にこれといった趣味もないこと、それらは通常の見合い相手であれば肯定的に受け止めたくはない反応かもしれない。事実、秋雄は、これまでの見合い相手よりは千枝の方がいいと感じるのであった。「ごく控え目に、当りさわりのない受け答えをするばかり。そのくせ、目の端で、ちらちら、こちらを値ふみしてくる」（17頁）他の女のようなじめじめした陰陰さがなく、「大きな目でききたいことを、けんめいに、きいてくる。目を輝かせて、子供づくりという子供っぽい夢を語る」（17頁）その「印象はさわやかであった」（17頁）からであるというのである。

もっとも、秋雄の不謹慎で安直な千枝に対する印象には触れておかなければなるまい。秋雄は、「この千枝が相手なら、少しばかり毛色が変わって、おもしろそうだし、それでいて、たいした苦勞もなさそうである。この女のやることを、傍からヤジ馬のように眺めているのもわるくはない、と思った」（16頁）と言っている⁵⁾。

「たいした苦勞もなさそう」という不純な動機がさりげなく記述されているが、後に自らが子育ての奴隷になりきってしまう結果として跳ね返ってくることには想像が及んでいない。実際には波乱万丈の結婚生活とその破局が待ち受けているのであるが、秋雄の当時の感じ方がいかにして裏切られていくかという興味が読み手には浮上してくる。「ヤジ馬のように眺めている」というのは、彼女の言うことに干渉しないという態度である。とすれば、千枝の子育てに対する暴走を止められなくなり、ひたすら従う生活が待ち受けていたとしても、それは結局のところ秋雄自らが選択した人生ということになりはしないか。同時に秋雄は、「こんな女と結婚すれば、生活にはずみというか、調子が出て、退屈も消え、生き生きした家庭が持て

5) この時の秋雄には、「乳児の社会的環境のなかで、父親は母親と同じように大きな影響をもつ」（フランク・A・ペダーセン、加藤千佐子訳（1986）〔フランク・A・ペダーセン編、依田明監訳（1986）1頁〕）という厳粛たる事実など思いもよらなかったと考えられる。

そうな気がした」(17頁)とも回想しているが、長男・英一郎と次男・健次が誕生し、兄弟を徹底的に差別化した子育てが実践され、両者がいがみ合い、英才として育てたはずの英一郎が息切れを起こしていく中で、この発想がいかにか安易であったかをも作品は解き明かしていくのである。

見合いにおける記述(「第一章 奇妙な見合い」)を押さえていく限り、秋雄には主体的に結婚生活を作り上げていこうという意気込みを読み取ることができない。千枝のペースに乗せられた受け答えに終始した見合いは、その後の千枝主導による生活の押し付けに秋雄が翻弄されていく様子を見事なまでに暗示している。作品はその冒頭部で、「あとから考えれば、その後起った喜悲劇のタネは、すべて、その見合いに顔をのぞかせていた。ただし、そのときには、松沢秋雄は、それをふしぎとか奇抜に思うより、まず新鮮なものに感じ、むしろ見合い相手の千枝にひかれることになったのだが——」(7頁)という始まり方をしている。

そうした立場から作品を改めて眺めてみると、冒頭の「あとから考えれば、その後起った喜悲劇のタネは、すべて、その見合いに顔をのぞかせていた」(7頁)というさりげない記述がこの夫婦の目標は破綻を来たすという意味で語られていることを自覚させられるのである。では、いつ、どうやって、喜悲劇が繰り広げられるのかという好奇心と不安を読者は自覚しつつ、この作品世界へと誘われると理解すべきであろう。〈悲劇〉とは悲惨な結末を暗示する。千枝の言うとおりにすれば、本当に東大に楽々と入れる子供ができるのか。また、本当の自由人ができあがるのか。これらの問いに対しては懐疑的にならざるを得ない様子が予兆されよう。一方、〈喜劇〉とは笑い飛ばしたくなるような批評精神を読者が抱くに至る様子を予感させる。つまり、女王の千枝を前にして召使の如くにしか振る舞えない秋雄には、穏やかな結婚生活などあり得ないという伏線を作品は注意深く敷いているのである。秋雄が千枝の奴隷へと化す姿は、世間の夫婦像に照らしてみた場合、やはり異様であり、〈喜劇〉的であるとの評価が下されよう。

ところが、弱冠24歳の千枝は秋雄に向かって、「わたしなら、理想どおりに、やってみせるんですけど」(10頁)と「聞きずてにできないことをさり」といった(10頁)のであった。この思い上がりとも解釈できる発言は本当に予定通りに進行し、所定の結果に到達させることができるのか。このような問いが読者の側には当然に生じてくるはずなのである。

見合いの席で、千枝は相当ぶしつけな質問を平然と秋雄に浴びせかけている。秋雄は「育児が趣味なんですか」(13頁)、「しかし、粘土をこねて、彫刻をつくるようなわけには行かんでしょう」(13頁)、「すばらしい作品という」と(13頁)、「そんなことができるんですか」(13頁)、「計画が要るんですか」(13頁)、「その計画が立つんですか」(13頁)と千枝からさらに言葉を引き出させるかのようにいうが、秋雄は千枝の返答を聞くにつれて性的誘惑に駆られていく。「粘土と粘土をこね合わせて、新しい粘土をつくる……」目の前の可憐な肉体ともみ合うさまを想像して、秋雄の声は思わずかすれ

た。」(14頁)、「秋雄はみだらな想像が恥ずかしくなり、あわてていい足した」(14頁)、「秋雄は、つりこまれて、うなずいた。」(14頁)、「千枝の話を聞いていると、秀才や英才が粘土細工のようにつくれそうな錯覚がしてきた」(14頁)、「秋雄は、胸がかわいた。また妄想がうずく」(15頁)、こうして秋雄は、千枝が自らと結婚することで英才を作りたがっている様子をひしひしと感じると共に、それに必要な性的交わりを強烈に意識し、心理的に千枝に吸い込まれていくようになる。何気なく「いろいろふうがありそうですね」(15頁)と言ってみると、「そうなの。いっぱいありますわ」(15頁)と「千枝は、無邪気に、とびつくようにいう」(15頁)のであった。熱に浮かされたかのような千枝の夢物語に付き合う中で〈女性〉としての千枝が一気に迫り、心身の高ぶりを押さえられなくなった秋雄は「心が動いた」(15頁)結果、「この女が伴侶なら、結婚生活も退屈しないで済むのではないか」(15頁)との感触を得るのである。性的衝動が激しく波打つ中で、秋雄は千枝の考え方に十分な批判力をもはや働かせることができなくなり、彼女の英才育成計画に洗脳されてもいく。

3. 結婚生活を追って

見合いの席での会話の後、「ティー・パーティーだけの披露ですませた」(18頁)挙式の様子がざりげなく語られ、場面は新婚旅行の様子へと一気に移るが、その様子は「目に見えぬベルト・コンベアにのせられたように、事は運ばれた」(18頁)と振り返られている。千枝にはIQ153の男性を逃すまいとして必死に媚を売った様子が想像され、一方秋雄は千枝に見事なまでに操縦されていったと見て差し支えない。

簡素な初夏の結婚式も中伊豆にある温泉宿への新婚旅行もすべて千枝が取り仕切って決められた(18頁)。新婚旅行の場面は、千枝による食と性の徹底した管理下に秋雄が支配されていく様子を露骨に描き出している。新婚初日の夕食から、千枝は秋雄が何を食べようとするかを目ざとく観察し(19頁)、「お酒、控え目にしてくださいね」(19頁)、「あの、お肉や魚は残してもいいけど、お野菜は、きれいに召し上がってくださいね」(19頁)と釘を刺す。そのような圧力に対して、「サラリーマン生活で辛抱を学んできている」(19頁)秋雄は「長い妥協の歴史の第一歩」(19頁)を刻むのであった。

夜の営みも男の子を妊娠しやすいよう「体位の指定」(21頁)をした上で、理性を失うまいとして、「監視でもするように」(11~12頁)必死でこらえている千枝の姿が秋雄には奇異に映り、「どうも、次から次へ、思わぬ工夫や苦勞が出てきそうである。夫たる者、ヤジ馬になって、おもしろがってばかりは居られない。英才づくりは一種の芸術、というだけに、夫にも、それなりの努力や覚悟が必要、ということなのであろう」(23頁)と感じてしまう。

「この女のやることを、傍からヤジ馬のように眺めているのもわるくはない」（16頁）というのが初対面の千枝に対する秋雄の感じ方であったが、それとは裏腹の振る舞いを求められたという点で、秋雄は自らの軽薄を恥じるべきであった。秋雄は朝食の際に「黄身は食べないで、白身だけにして」（23頁）という千枝に対して「やれやれ。いまからこんな努力をさせられるんだ。これで生れてくる子が東大へ入らなければ、とんだバチ当りというわけだ」（23頁）と「悪態をつくようにいった」（23頁）が、かと言って千枝に反抗して黄身を食べたかというそうではなく、「箸を置いた」（23頁）のであった。

つまり、秋雄が新妻に対して教え諭すような振る舞いは一切描かれてはいない。逆に、千枝が秋雄の前に巨大な壁として立ちただかっており、秋雄はその指示に促されるままに振る舞っていた様子が誇張気味に語られているとみなすべきなのである。秋雄が悪態をつきたくなるのは自然の勢いとも言うべき反応なのではあるが、千枝の「大丈夫。きっと東大文一へ入れてみせます」（23頁）という脅迫的な響きにすべては飲み込まれてしまう。千枝の考えを修正できない秋雄の姿はこうして新婚旅行の時にその萌芽を十分に見せているが、だとすれば、千枝が膨大な書籍を通して得たという育児理論⁶⁾そのものが間違っていたり、千枝が曲解したりしていた場合には一体どのような事態が想定されようか。当然、この夫婦は子供を悲劇へと追い込んでしまい、子育て第一主義で他は犠牲にするという姿勢で貫かれようとしている結婚生活に安らぎの場はないということになってしまうのである。家庭内での主導権を握るのは千枝であり、秋雄は千枝の言いなりに行動するよう導かれる。では、千枝の言うことは絶対に正しいのか。最新の育児理論を学んだ彼女を無邪気に信じて秋雄が行動すれば、それで万事無難に事が運ぶと言えるのであろうか。

家庭内では、秋雄は千枝の言う通りに振る舞うよう仕向けられていく。秋雄の家父長としての存在感は、当初から存在しておらず、千枝中心で物事が決められていくスタイルが松沢家のありようであったが、その千枝とは言えば、結婚当初から男女の産み分け方がこれまで学んでいた知識と新説では異なるという事実にあたったことでもう動転し、狼狽してしまうような有様なのであった。具体的に指摘するなら、食事については「妻はアルカリでも、夫は酸性食品をとらなければいけないんですって」（25頁）と言われ、性行為についての解釈も、「今度発表された新説を見ると、まるで逆だったことがわかりました」（27頁）という具合なのであって、千枝は書籍から得られる新説に翻弄されているのである。秋雄は「運を天に任せて、気楽に行こうよ」（27頁）と言って慰めるが、千枝の受胎に対する戦略が間違っており、新婚早々に食と性の在り様を根本的に覆す必要性に迫られたという事実が

6) 中原弘之(1984)により、細目に分類すると、「保育理論・保育思想・保育史」「保育制度・保育行財政」「保育者養成」「保育環境」「保育内容・保育計画」「保育方法・保育形態・保育評価」「健康・身体・安全・運動」「社会・社会性」「自然・認知・知的教育」「言語・文字」「絵画制作・造形」「音楽リズム」「発達・人間関係・人格形成」「遊び」「家庭・地域・社会」「児童文化・絵本・玩具」「乳幼児保育」「障害児保育・統合保育」となる[32~33頁]。

孕む危うさに思いを抱いてもよかったのではないか。

また、千枝が敷いたレールが英才育成のあり方として正しいとしても、子供が東大に入れるとは限るまい。また、「はじめから東大行きと決めておいて、自由なのかい」（33頁）、
「人間をつくるということはわかるけど、それを東大などに限定しなくとも……」（35頁）と秋雄が後に疑問を呈するように東大に入ることで自分が幸せかどうかという議論もあろう。そのような場合をも想定した場合、夫の秋雄は暴走しかねない千枝に対する抑止力として機能することが理想的な姿であると考えられる。が、この夫婦関係は、妻が一方的に主導権を握り、夫はそれに付き合わされるだけという形で推移することが既に新婚旅行の場面において予感されているのであって、思い込みの激しい妻主導の関係がどこまで続くのか、いや破綻を来たしても当然ではないかという考えを読者に強調する仕組みとなっているのである。

しかしながら、「心身ともに疲れて、四日間の新婚旅行は終わった」（23頁）後に始まった新婚生活は、「吹きだまりに居るような会社生活に比べれば、千枝との新婚のくらしは、白黒映画のあと、カラー・フィルムがはじまるように、あざやかであり、生き生きしていた」（24頁）と表現するに足るものであり、「秋雄にとって、毎夜、たのしい作業が続いた」（24頁）のであるから、将来に対する不安よりも、目の前にある喜びの方がはるかに大きく勝っていたのであった。結婚当初、将来に対する不吉な予兆は秋雄の頭からはかき消されてしまっていたと見るべきであろう。男女の産み分けが逆だったと悲観する千枝に対して「秋雄は、自分が動物実験になった気がした」（28頁）が、それも「もっとも、ある程度たのしい動物実験ではある」（28頁）と考えるし、「でも、わるくはない」（28頁）、「おれは、あまりにも、実験も挑戦もしないできた……」（28頁）とも心の中で反芻しているからである。千枝と巡り合い、結婚したおかげで、人生に新たな夢を抱くことができた、「〈この女となら、ほんとに人生退屈しないですむだろうな〉」（36頁）と思い、「〈どこまでいきいきと生きられるか。いっしょに走ってみよう〉」（36頁）という気にまでなったのだから、この希望に夫婦で掛けてみようというのが当時の偽らざる秋雄の感じ方なのであった。「秋雄は、毎日、駅ホームの階段を二段とびにとび上るようにして、帰途を急いだ」（24頁）ともあることから、新婚生活の充実感に酔いしれていた様子もうかがえるのである。そのような秋雄に対して、語り手は「子供の人生を実験台にのせる——そこから起る災禍についてまで、このときには気づきようもなかった」（36頁）と言う。悲劇は確実に予兆されているのである。

4. せめぎあいの中で

千枝の言うままに行動することに馴らされていく秋雄は、千枝の妊娠後は「頭のいい子を

つくるためには、妊婦の感情の安定が不可欠なの」（40頁）と「釘をさされ」（40頁）、「千枝のひたむきさに打たれ、いい子をつくるために、秋雄もまた心ならずもいい子にならざるを得なくなった」（40頁）のだった。「千枝の感情を害しては、子供の脳の発育にさしわりが起る」（42頁）し、「千枝の間脳と脳下垂体の働きをみだしてはならない」（46頁）⁷⁾と洗脳されてしまっていた秋雄は、もはや、完全に千枝の権力下に従属する構造の中に絡め取られていた。反抗しないのが無難という行動パターンに秋雄は陥ってしまうのである。

同時にこの事実からは、秋雄が家父長としての存在を試される予感を微妙に意識せざるを得なくなっていったとも考えられる。と言うのも、注意深く見ていくと、千枝主導の意思決定スタイルに対する反動を露わにするかのように千枝に対して面子を張る場面もさりげなく描かれ出しているからである。男の子を産むための食事を間違えたという千枝に対して、「秋雄は、威厳をつけてうなずいたが、内心は、ほっとした」（25頁）とその心情を吐露している。ここで言う威厳とはわざと千枝に意識させるようにしての行為と見て差し支えない。また、「少しもったいぶっていった」（26頁）りもする。「千枝のお腹がかなり張り出たその年の暮」（41頁）には、「ぼく、いや、これからは、おれで通す。ぼくでは、子供っぽくていけないから」（41頁）、「それに関係があるんだが、ぼく、いや、おれ、この正月休みから、ひげをのばそうと思うんだ」（41頁）と「珍しく、肩をそびやかしていった」（41頁）のであった。育児理論に振り回されながら暴走する千枝についていっただけでは、まるで母親離れできない息子でもあるかのようなのではないか。秋雄は、家父長としての面子を保たなければ、生まれてくる子供に対して、示しがないということをも本能的に察知していたはずなのである。

けれども、英一郎が誕生した後の日常生活にあって、「全面的役割が徹底するのは何とんでも乳児を育てる母親だ」⁸⁾から、秋雄は千枝との間に生じる考え方の齟齬に対して、議論を重ね、理解を共有するという姿勢を放棄してしまっている。理詰めで千枝に迫っていく場面は、英一郎が小学校1年生の運動会を迎えるに際し、「ぼく、運動会でがんばろう。一等になるんだ」（136頁）と言った⁹⁾ことに対して、「とんでもない。絶対、一着になんかなるものではありません」（136頁）、「建前論ではなく、親身になって書いている育児書では、運動会は英才にとっては無用の昂奮と消耗をもたらすだけと、ちゃんと批判しているわ」（137頁）と切り返す場面以外には取り立てて見受けられないのである。

7) 牧野カツコ (1986) の言う「妊娠中の母胎の健康状態は、胎児の発達に著しい影響をもつが、最近では胎児の聴覚や精神の発達についての研究も進んでおり、妊娠中の母親の意識や行動が胎児に与える影響も注目されている。」[733頁]という理論が秋雄の頭に刻印されているのである。

8) タキエ・スギヤマ・リブラ (1982)、綾部常雄編 (1982) 355頁

9) 薦田未央 (2007) は、「家族以外の社会集団で承認されることが、あらたな学びを求める力になり、学習を重ねることで本格的な学齢期を迎える準備となるのであろう。」[44頁]と述べ、学校という社会で認知されようとする英一郎の立場を支持していることになる。

その時、秋雄は「育児学者というか、教育学者の意見も、さまざまだろうね」（137頁）、「そういう意見の中で、当然、衝突したり、矛盾したりするのが、あると思うけどね」（137頁）¹⁰⁾、「きみは、その中で、何を基準にして選んでいるのかね」（137頁）とにじり寄ったが、「新しいものほど、いいと思うの」（138頁）、「だから、わたし、次から次へと、新しい本を読まなくてはならないのよ」（138頁）という千枝に対して言い返せない。〈自動車を買うわけじゃあるまいし、本気なのか〉（138頁）、〈生産工場でもあるまいのに〉（138頁）といったかったが、それらは結局の所、心の中で生じたつぶやきでしかなく、沈黙を余儀なくされるのである。

このやり取りが生じたのは、結婚後8年余りが経過した後のことであった。それまでも秋雄は、千枝が度々育児理論に振り回され、思考が混乱した場面に直面していた。ところが、母親である千枝の感情を乱すと子育てに悪影響が出かねないという遠慮が優先したこと、千枝とのいきいきとした生活にそれなりの刺激を得、夢も共有できたことなどが先行し、千枝に対する批判者としての位置には立ち得なかった。相異なる育児理論を千枝が都合の良いように曲解し、頑固なまでに自己の主張を押し通そうとする状況に立ち至っても、「議論しては、間脳が悪い」（48頁）と言いつけ、「夫婦のいい争いは、子供に情緒不安定を起す」（68頁）と信じ、自らが折れ、衝突を回避し、夫婦喧嘩を起さないで済まそうとするのである。

まだ妊婦だった千枝が東大入試合格発表会場で記念写真を写し、それを繰り返し眺めることで、「わたしたちの子が合格する日のこと、母親であるわたしの十八年だか二十年後の姿がこれなのだ、その写真を見続けることで、暗示にかけるの」（43頁）と発言した時、「千枝の真剣そのものの表情に、秋雄は〈ばからしい〉という言葉のみこんだ」（43頁）が、「そのひたむきさに負け」（44頁）、「二人して骰子を投げたあとである。ルビコン河であろうと、どんな大河大海であろうと、目をつむって渡る他はない、と思った」（44頁）のであった。「心理学では、ピグマリオン効果というのよ」（44頁）¹¹⁾とたたみかける千枝に対して、「〈神様が登場すれば、やはり神がかりの話ではないか〉と思ったが、秋雄は黙っていた」（45頁）し、「本気で想像し、思い込んでしまうと、そのことがついに実現する、というのがピグマリオン効果なの」（45頁）と解説されれば、「秋雄は、ため息をつきながら、うなずいた。彫刻の美女がよみがえるものなら、自分はそちらに賭

10) 山田卓三（1993）は「四～五歳になると“見せたい、見てもらいたい”“競争したい”という意識が生ずる時期なので、見せるため、競走するための発表会や運動会があってもいいと思います。」[81頁]としており、千枝とは逆の立場に立っている。

11) 教師養成研究会教育心理学部会（1981）は「ピグマリオン効果 pygmalion effort」を以下のように説明する。「たとえばランダムに選択した児童に知能テストを行い、一方には「この子は今後伸びる」といった予言的コメントを教師に与えると教師の期待が児童に伝わりその後の成績が上昇する傾向にある。このような予言効果をいう。女性の彫刻像を恋して化身を願った結果その願望が達せられたというギリシア神話のピグマリオン王の故事にちなんで名づけられた。」[234頁]

けてみたい、と内心では思った」(45頁)という具合に背反する感情がせめぎあう中で、千枝に結局は迎合してしまうのである。

「受験生やその親たちの中で、大きなお腹をした新妻を撮すなんて、いかにも恥ずかしく、秋雄の足は重かった」(46頁)が、「カメラのファインダーからのぞくと」(46頁)「秋雄には、それがまた、この上なく愛らしい姿にも見え」(47頁)、「お腹の子供を圧迫しない範囲内で、力いっぱい抱き締めてやりたい」(47頁)とも振り返られる。とすると、千枝の突拍子もない要求をひたすら受け入れる秋雄はこの時点では千枝との夫婦関係に賭けることこそが正しい道であると解釈していたと見ることができよう。

英一郎誕生と同時に千枝が命令するがままに、秋雄は「建具屋に出かけ、家中のガラス戸などをすべてアルミ・サッシと取り替える」(53頁)作業に掛かりつきりとなったことも、「クラシックの名曲類」(56頁)を親子で聞いて酌量するのも、「新説」(56頁)によって否定されるが¹²⁾、「いずれにせよ、早く気がついて、よかったな」(57頁)と言えば、「千枝は、力いっぱい、秋雄にしがみついた」(57頁)のであった。この例についても、同様に解釈できる訳であり、新生児を迎える緊張した雰囲気¹³⁾の中で秋雄は千枝を受容するのであった。

しかしながら、子育てが日常生活に根付くようになると¹⁴⁾、秋雄は予想もしなかった我慢を強いられるようになる。幼児にとってテレビがよくないという育児理論に執着する千枝に対して、「秋雄は、がっかりしていった。未練だけでなく、いよいよ育児の犠牲になるのかと、暗い気持ちにもなる。」(67頁)が、テレビを押入れに入れ、英一郎が寝ている時のみ見てもいいという千枝の指図に対し、「ともかくテレビが見られる以上、辛抱しようと、秋雄は千枝の指図に従った。」(67頁)のであった¹⁵⁾。

また、英一郎が時間の感覚をつかめるように、「針で動く」(70頁)「振子が動いて見える時計」(71頁)を買って来いと言われると、秋雄は「気の重い声」(71頁)となり、「〈やれやれ〉といたいのをこらえ、無言」(71頁)にならざるを得ず、結局の

12) 松崎巖(1992)は、「昔から、胎教という考えから、出産前によい音楽を聞かせておけば、すぐれた音感の子どもが生れるというようなことがいわれてきたが、これは学問的には実証されていない。最近の研究で確認されたことは、胎児はすでに胎内で母親の声を聞き分けており、これにもっとも強く反応するということである。」[12頁]と述べ、無藤隆(1994)も、「たとえばモーツァルトを聞かせるのがよいかどうかなどに、別に根拠はないと思われる。つまり、親の趣味に合わないものを無理に聞かせる必要は見つけられない。」[18頁]という立場にある。

13) 新生児の様子については、大藪泰(1992)に詳しい。

14) 千枝は育児に全精力を注いだが、その姿は渡辺秀樹(1999)が「1970年以降の専業主婦におこったことは、家事時間の減少と、育児時間の増加であったのである。」[110頁]と述べるように、この時代における母親の雰囲気をよく伝えているとも言えるのである。

15) 村田孝次(1990)は、「テレビはそのモデリング効果を通じて、子どもに強力な影響を発揮する。その効果は、とくに就学前の子どもに対しては決定的である。したがって、テレビの制作にあたる者は、子どものためにどんな番組を提供すべきかについて留意する重大な責任があり、また親はどんな番組を子どもが見ているかについて、よく知っており、その視聴を統制する義務がある。」[107頁]としている。

所、「わかったよ」(71頁)と「ぶっきらぼうにいい、歩き出そうとする」(71頁)のであった。

新婚ムードが抜けてくると、秋雄には育児に対して強引で頑なな千枝に対する批判精神も生じてくる。「まるで、体育の先生」(88頁)のように、前回りを英一郎に強いる千枝に「もうやめろ。うっかりすると、首の骨を折ってしまうぞ」(89頁)と諭してみても、クレヨンで線を無理に書かせようとしている千枝を「秋雄がとがめる」(91頁)ような口調で迫ってみても¹⁶⁾、「千枝の立てたカリキュラムがあるはずである。勝手なことはできない。」(92頁)として立ち止まるのが秋雄の姿であった。

しかし、秋雄のやりきれなさはくすぶっていく。英一郎3歳の誕生日、デパートの食堂でも、目の前に置かれたお子さまランチを使って学習をさせようとする千枝に対して「秋雄は、やりきれなくなって、「もういいじゃないか」」(101頁)と言う。「食欲がなくなった」

(101頁)し、「席を蹴って帰らなかった」(101頁)が、「耳をふさぐ思いで、耐えなくてはならない」(101頁)といった按配である。健次が迷子になったという知らせを受けると、

「あたふたとデパートへ急ぐ自分が、哀れにもなったし、腹も立ってくる」(105頁)のみならず、「育児など、本来、単純なはずなのに、創造性だの自主性だのと、考えすぎたのが、あだになったのではないか」(105頁)とまで考えるようになる。「五歳児になるまでに、漢字五百をおぼえさせるという計画」(114頁)17)に対して「秋雄は、ため息の出そなのをこらえた」(114頁)が、それも「いっしょに乗りかかった舟から下りるわけには行かない」(114頁)という判断においてのことであって、納得しているという境地からはかけ離れた姿が手に取るように描かれているのである。その夜、「デパートで急に他人をおどした」

(116頁)英一郎の奇異な行動などなかったかのように千枝が眠ろうとする英一郎に本を読み聞かせようとしたり、おぼえた事柄を復唱させようとしたりして迫り続ける姿を見た秋雄は「強い酒でもあおりたい気分」(115頁)を自覚し、「その日の出来事が、まだまなましく脳裏にやきついている」(118頁)のであった。

小学校1年生になった英一郎に自宅でテストを受けさせ続け、「自宅学習でのテスト成績の集計が三〇〇〇点を越すごとに」(134頁)マンガ本を1冊買い与えるというルールを作った¹⁸⁾千枝に対して、秋雄は「点数点数で、味気ない感じだな。点数だけ気にする子

16) Sroufe&Waters(1982)は、「乳児の信号に対する養育者の応答性が後の愛着の質を予測する」[744]と言うが、千枝は英一郎が興味のないような反応を示している様子には気づけないでいる。

17) 内田伸子(1989)は子どもの読み書き能力の獲得について次のように述べている。「国立国語研究所の調査によると、小学校入学までにほとんどの子どもはひらがなを読める。半数の子どもはお話の絵本を1人で読める。また、ほとんどの子どもは自分の名前をひらがなで書ける。簡単なことばを書いたり、お話や手紙を書くといった活動を始めている子どもも半数に達する。」[170頁]これが実態であるとすると、千枝の計画は常軌を逸しているということになる。

18) 笠井仁(1996)は、「学力(狭義)と知能との関連において、知能水準から期待される以上の学力を示す場合をオーバーアチーバー」[39頁]と呼ぶが、IQ119(120頁)の英一郎にとっては、果てしなきオーバーアチーバー状態を強いられるのである。また、桜井茂男(1999)によると、「子

供ができるじゃないか」(134頁)と「首をかしげた」(134頁)のであったが、千枝は「そう、それでいいのよ」(134頁)と応じ、「しかし、人生というのは、長丁場の勝負じゃないかね」(134頁)と続ける秋雄には全く耳を貸そうとしない¹⁹。「見た番組に関連した偉人伝や地理の本などを、次の日、本屋へさがしに行かされる」(134頁)ような生活が当たり前になってくると、「秋雄は味気ないだけでなく、息苦しくもなってくる。おかげで、煙草や酒の量が、少しずつふえて行く。散歩と称して、少し離れた商店街のパチンコ屋へ抜け出したりもする。」(135頁)といった風に反応せざるを得なくなってくる。秋雄は千枝に言い返せない。奴隷の如く従うのみで、ストレスが溜まる一方である。

なぜ、そのような態度に終始せねばならないのか。その理由は「うっかり口出して、千枝と口論になり、英一郎の情緒不安定を招いては困る」(135頁)と説明されている。夫婦間のトラブルが子供の情緒を乱すという育児理論に基づいての行動という理解ができるのであるが、両親の精神状態が不安定で日常生活に満足が得られていない状態が子供に対していい影響を及ぼすのかという別の問題もこの場面では立ちだかっているはずなのである。また、英一郎を朝から晩まで強迫的に勉強へと駆り立てる千枝の精神状態も決して健康とは言えない。秋雄については、疑問が山積していく日々を過ごす中で、我慢をひたすら強いられ、煙草や酒でやりきれない心情を晴らすという防衛パターンに終始せざるを得なくなっていく。千枝と戦うよりは服従するという安逸へと秋雄は流れていく。千枝の暴走を止める役割を秋雄は担えない。

「読み、書き、算数にさえ利用される」²⁰状態とも言えるほど徹底的に管理された英一郎は、そのことからくるフラストレーションが溜まってか、学校の休み時間にブランコを一人占めにし²¹、「教師が手をのばしてひきずり下ろそうとしたとき」(140頁)、「いきなり砂をつかむと、教師の顔に投げつけ」(140頁)、「教師の眼鏡が割れ、破片が目の縁に刺さった」(140頁)という事件を起こしてしまう²²。「秋雄としては、ひたすら頭を下げて詫言

もたちを学習行動へと動機づけているものは、わからないことがあるから調べてみたい、楽しいから学習する、というような内発的動機 (intrinsic motive) と、先生や両親から勉強するように言われる、ごほうびがほしくて学習する、というような外発的動機 (extrinsic motive) に大きく分けられる」[2頁]が、英一郎は外発的動機のみを肥大化させられるよう追い込まれていく。

19) 芹沢俊介 (1996) は、「早期教育の場合、母親の子供への要求は母親の「はてしない努力」に見合う子供の努力である。あるいは母親の「はてしない努力」に報いて子供が上げる成果である。」[6頁]と述べるが、千枝の感情と見事な符合を見せていると言ってよい。

20) エリク・H・エリクソン著、仁科弥生訳 (1977) 332頁

21) 松壽洋子 (1996) は、「集団に所属している子どもたちの場合においても、仲間とのやり取りに熟達していない幼児の場合、大人の手助けが必要になってくるために大人 (母親や保育者) の果たす役割も、仲間関係にとって大切なものである。」[52～53頁]と述べているが、母親である千枝が仲間関係を競争という側面でしか捉えようとする状況とこの事件との関わりを無視することはできない。

22) 常田秀子 (1997) は、「子どもは1対多のコミュニケーションを通じて、日常的な1対1のコミュニケーションでは獲得しえないような公共性、集団意識を獲得するようになる。このことは、ひいては、子どもたちの私的な経験を超えた公共的・抽象的な知識の獲得を媒介するとも考えられる。」[85頁]としているが、英一郎の行動を見る限り、公共性の獲得には7歳の時点で既に失敗していると言わざるを得ない。

るばかりであった」(140頁)が、「英一郎の熱烈な弁護人」(142頁)である千枝の前に、「しかし……」(142頁)、「しかし、英一郎のやったことは……」(142頁)、「……しかし、そんな風というなら、また同じことが起るかも知れんぞ」(142頁)、「しかし……」(143頁)、「しかし、学校教育がはじまったばかりなのに、それを無用だなんて」(143頁)と疑問を呈しつつも²³⁾、「しかし、しかし、とあなたはそればかり」(143頁)という千枝に押し切られてしまいそうになる。「砂をぶつけるなんて、やはり、よくない。いつかデパートで他人をおどろかせたときもそうだが、あの子の中に、おれたちの気づかぬ粗暴なものがかくれているのではないか」(144頁)と言えば、「粗暴なのは、むしろ、健次じゃないかしら」(144頁)、「どうしてといったって……。そういう直観がするのよ」(145頁)と切り返される。

ここで明らかなのは、千枝が育児理論に則って理想の子育てを実践しているようでありながら、肝心な場面になると、理論的根拠を何ら持たない直観で物事を判断しようとしている事実である。この歴然たる事実に対する秋雄の批判は見られない。直観は恣意性を免れず、そこには感情による判断の危うさが濃厚に漂うのである。

議論はこれ以上進まない。秋雄の千枝に対する不信感はこうして醸成されていく訳だが、千枝は耳を貸そうとはしない。この状態は、言わば父親不在の母子家庭を想像させる。いや、父親を見下げる母親が家族の中心に君臨している状況が子供に伝播する可能性を考えると、事態は一層深刻と言えるかもしれないのである²⁴⁾。

5. 結語

結局、見合いに始まる千枝との交渉の中で、秋雄は千枝に対して、対決を避け続けているのである。千枝の英一郎を意のままに育てようとする思いは、秋雄が自らの言いなりとなる中で膨張し、歯止めがきかなくなっていく²⁵⁾。本稿では、英一郎の幼児期までにおける

23) 高橋道子、藤崎真知代、仲間紀子、野田幸江(1993)が「攻撃的・自分勝手な子どもは嫌われがちである」(117頁)と述べていることを思えば、秋雄に迷いが生じるのは当然の反応と言える。

24) 松壽洋子(1996)は、「集団に所属している子どもたちの場合においても、仲間とのやり取りに熟達していない幼児の場合、大人の手助けが必要になってくるために大人(母親や保育者)の果たす役割も、仲間関係にとって大切なものである。」[52～53頁]と述べているが、母親である千枝が仲間関係を競争という側面でしか捉えようとする状況とこの事件との関わりを無視することはできない。

25) デイビッド・B・リン著、今泉信人、黒川正流、生和秀俊、浜名外喜男、吉森護訳(1981)は以下のように結論付けている。「父親と母親の間の不一致は、子どもの望ましくない発達と関係がある。研究によると、両親間の不一致は、子どもの社会的不安定、不適応、集団内での人気の低さ、リーダーシップをとることの失敗、自己評価の低さ、率先して課題に取り組めないこと、低い自己受容、低い知能指数、学業成績の不良、学習上の諸問題と関連している。」[438頁]だとすると、英一郎の将来には暗雲が立ち込めていることになろう。

千枝と秋雄の夫婦関係を秋雄の立場から分析してみたが、そこには千枝の英才育成計画が破綻を来す結果に至るということも既にさりげなく描かれている事実を発見した。だとすれば、千枝の強引な姿勢に疑問を感じる秋雄の姿こそ全うであると言うべきなのである。しかしながら、秋雄が育児理論に振り回される千枝に正面から向き合い、言葉を紡ぎ出す場面は、英一郎が運動会で張り切ろうとする時のみであり、その唯一の機会においても、話し合いは物別れに終わるのであった。

では、千枝に奴隷のごとく付き合わされる秋雄は、そのような生き方に甘んじ続けることができるのか。いや、感情的な判断に終始する母親が司令塔となり、衝突の回避をひたすら恐れる父親が付属物ようになって振る舞い続ける生活は、一体いつまで持ちこたえられるのか。英才育成計画の破綻が予言されている事実は本稿で考察した通りであるが、それではカタストロフィーはいつ、どのような形で姿を露わにするのか。読者の興味はそのような疑問を抱く中で、確実に高まりを見せるはずなのである。

とすれば、作者・城山三郎がこのような夫婦像を描いた背景には、英才は計画養成し得るものなのかという疑問が間違いなく横たわっていたと考えられる。見合いの席でそれが可能だと言い切った千枝はその後、様々な異なる流派の育児理論に翻弄され、秋雄も目まぐるしく態度を変えるよう求められるが、その際に秋雄は千枝に対して家父長として筋の通った意見を言い、千枝と火花が散るような育児論争があってもよかったのではないか。その意味で、作品には父権の没落も確実に描かれていると言えるのである。

本稿で見てきたように秋雄は千枝の強引さの前に、何を言っても通じないというあきらめが先行している。けれども、千枝との話し合いの中で「しかし」という接続詞が幾度も登場する様子を追えば、千枝の意見にどうしてもついてはいけないう秋雄の姿が明らかとなってくる。作者はそのような男性を造型することによって、読者が秋雄の視点に同化して千枝を批判的に見る機会を提供しているのだとも理解できよう。

作者は英一郎英才育成計画が破綻する様子を描くが、夫婦が合意の下、一致団結してこそ、英才育成が可能となるのは言うまでもないことである。また、幼児教育が極めて重要な事実も広く共有されている知識であろう。英一郎は知育のみを発達させるようなプログラムの中に投げ込まれているが、徳育については何ら育まれていない。よって、ブランコをひとり占めしたり、担任教師の眼鏡を割る事件が起こっても、英一郎自身が反省を見せる場面は一切描きようがないのである。このことを通して、読者は知育偏重、徳育不在のまま幼少期を過ごした英一郎がそのままの路線を突っ走った場合、アンバランスな成長の仕方をし、ひいては道徳的に許されない行為へとつながるのではないかという予感を抱くはずなのである。また、千枝が英一郎への過保護を募らせ、次男・健次を放任すれば、そのような母親の心中を英一郎は鋭く察知し、健次との間に苛酷な衝突が発生するのも防ぎようがない。

城山三郎は、育児に熱中する過保護な母と給料を運んでくるだけの無力な父をいささか

過剰なまでに類型化して描くことによって、読者に問題点を分かりやすく提示することに成功している。作品が発表された1978年と言えば、日本ではウーマン・リブ運動が盛んだった時代であり、千枝のような母親はおそらく実在していたであろう。無力な秋雄の姿勢は、日本の男性達が女性に過剰なまでに支配されざるを得ない暗い未来を暗示しているとも言える。また、アメリカ発のウーマン・リブ運動の論理も含めて新しい知識にすぐ飛びついてしまう女性達の姿勢に対する批判もまた確実に存在しているのである。

【引用】

本文の引用は、城山三郎『素直な戦士たち』（新潮社 1978年9月）によった。

【参考文献】

- 白井博（1991）「対人関係の発展」、内田伸子、白井博、藤崎春代『〈ベーシック現代心理学2〉乳幼児の心理学』有斐閣
- 内田伸子（1989）『幼児心理学への招待——子どもの世界づくり——』サイエンス社
- エリクソン、エリク・H著、仁科弥生訳（1977）『幼児期と社会 1』みすず書房
- 大藪泰（1992）『新生児心理学——生後4週間の人間発達——』川島書店
- 笠井仁（1996）「学力と学業不振」、杉浦一昭、新井邦二郎、大川一郎、藤生英行、浜口佳和、笠井仁『よくわかる発達と学習』福村出版
- 教師養成研究会教育心理学部会編著（1981）『新教育心理学』学芸図書
- 桜井茂男（1999）『子どものやる気と社会性』風間書房
- 薦田未央（2007）「やる気を育てる基盤」、伊藤崇達『やる気を育む心理学』北樹出版
- スギヤマ・リブラ、タキエ（1982）「日本の女」、綾部常雄編『女の文化人類学——世界の女性はどう生きているか——』弘文堂
- 高橋道子、藤崎眞知代、仲間紀子、野田幸江（1993）『子どもの発達心理学』新曜社
- 常田秀子（1997）「乳幼児保育と発達」、井上健治、久保ゆかり編『子どもの社会的発達』東京大学出版会
- 徳永光展（2009a）「受験戦争という現場——城山三郎『素直な戦士たち』の世界——」、荒木正見編著『場所の癒し』中川書店
- 徳永光展（2009b）「城山三郎『素直な戦士たち』論——行き詰る英才教育——」、顧也力総主編・陳多友執行主編（2009）《東亜地区日語教育日本学研究前沿文存》華東理工大学出版社

- 徳永光展 (2010a) 「城山三郎『素直な戦士たち』論——秋雄・千枝の関係と英一郎の幼児期を中心に——」、「大葉応用日語学報」第4期 大葉大学外語学院応用日語学系
- 徳永光展 (2010b) 「その日」以降の松沢家——城山三郎『素直な戦士たち』読解への一視点——」、劉曉芳主編《日語教育与日本学研究——第5届大学日語教育研究国際研討会論文集——》華東理工大学出版社
- 中原弘之 (1984) 『乳幼児の発達と保育研究』大日本図書
- ペダーセン、フランク・A著、加藤千佐子訳 (1986) 「父親と乳児に関する研究の問題点」、ペダーセン、フランク・A編、依田明監訳 (1986) 『父子関係の心理学』新曜社
- 牧野カソコ (1986) 「母親」、日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』東洋館出版社
- 松崎巖 (1992) 「子どものための芸術音楽」、高橋好子、多和はる、鳥居美智子、松崎巖、米山文明 (1992) 『音楽をたのしむ子どもたち——保育と音楽表現活動——』文化書房博文社
- 松崎洋子 (1996) 「遊びと仲間関係」、高橋たまき、中沢和子、村上史朗共編 (1996) 『遊びの発達学 展開編』培風館
- 無藤隆 (1994) 『赤ん坊から見た世界——言語以前の光景——』講談社
- 村田孝次 (1990) 『児童心理学入門 三訂版』培風館
- リン、デイビット・B著、今泉信人、黒川正流、生和秀俊、浜名外喜男、吉森護訳 (1981) 『父親——その役割と子どもの発達——』北大路書房
- 山田卓三 (1993) 『生物学からみた子育て』裳華房
- 渡辺秀樹 (1999) 「戦後日本の親子関係——養育期の親子関係の質の変遷——」、目黒依子、渡辺秀樹『講座社会学2 家族』東京大学出版会
- Sroufe, L.A. & Waters, E., (1982), Issues of temperament and attachment. *American Journal of Orthopsychiatry*, 52, 744.

要 旨

This paper analyzes the conditions of the Matsuzawa family centering on Akio, the husband, in the novel entitled "Obedient Warriors," authored by Saburo Shiroyama. Chie's partiality to Eiichiro, the oldest son, was abnormal, and her discriminatory behavior toward Kenji, the second son, was extraordinary. However, as well as Chie's abnormally strong obsession, Akio's vigor less personality could also have a significant effect on what is behind the scenes by which such a family was formed. In this couple, the pattern of their relationships was already foreseen by the events on their honeymoon, where the wife, one-sidedly, took the lead and the husband was just forced to obey his wife. This remarkable tendency in their relationships is gradually uncovered later on. By doing so, the story tries to emphasize a concept to readers, how long the relationship led by this opinionated wife will continue or should this relationship naturally be terminated. As the family head, how could Akio manifest his leadership in the rearing of their children? There exist various scenes in this story where Akio should play the role to stop Chie who goes out of control by simply claiming that the latest child-rearing theory is the best however, Akio is overpowered by Chie as a result. How should this power relationship be evaluated? The story develops so that readers become intrigued as to why Akio has no power over such developments in their relationships. Tracing the story based on the side of Akio could offer an opportunity for readers to consider how important the role of the father is in child rearing.

キーワード : Saburo Shiroyama, Obedient Warriors, Akio Matsuzawa,
absence of the husband, the wife going out of control,
fabrication of child-rearing theories

투 고 : 2010. 2. 28
1차 심사 : 2011. 3. 19
2차 심사 : 2011. 4. 2